

ジョージア (グルジア) 便り その54

世界を飛び回る楽しみ

文 高野陽年 text by Yonen Takano

ポルトガルでのガラコンサートを終え、ガラのレセプションパーティーに招待された。主催がポルトガル随一の大富豪とあって、賓客は皆タキシードに豪華なドレスで着飾っている。僕も一応はスーツを着ていたが、なんだか分が悪く、そして何よりもお腹が空いていたので一緒に踊ったダンサー達とこっそり抜け出し、リスボンの夜の街へと繰り出した。一際エキゾチックな様相のブラジル料理屋でボン・デ・ケージョをつまみながらカイピリーニャで乾杯していたのだが、気付けば午前2時を回っていた。それでも街中は人でごった返し、ポルトガル語からフランス語、英語とさまざまな声が聞こえてくる。薄オレンジの街頭の照明がリスボン特有のクリーム色の石畳に反射して妖しげな雰囲気を出していた。リスボンの夜をもっと満喫したかったのだがオマーンでバレエ団のツアーに合流するため、結局一睡もせず僕はパートナーとともに空港へと向かった。

誰もいない未明のリスボン空港は僕らの不安を増長した。よくよくチケットを見るとフライトフルトでの乗り換えが50分しかない。乗り換えには際どい時間だ。空港の係員に確認しよう

思っても誰もカウンターに居ないのだ。南欧特有のいい加減さなのか、ヨーロッパ特有の組合の労働時間の規定なのか、とにかくイライラを募らせながら飛行機に乗り込んだ。

フライトフルトでは空港をひた走り、次の飛行機を目指したが、ヨーロッパのハブ空港とあってとにかく広く、随一の不安は的中したのだ。結局のそこの日のうちにオマーンに着く飛行機は見つからずフライトフルトで一泊する羽目になってしまった。どうせなのでビールとソーセージでも食べに行こうと街へ出たが、リスボンの雰囲気とは打って変わって、整理された街の外観が無機質的で土曜の夜だというのに人気もあまりない。ルイヴィトンやヴェルサーチなど連なる高級ブティックのショーウィンドウだけがやたらと不気味に光っており、結局、静まり返った暗い広場の中に荘厳とそびえ立った旧オペラ座のそばにある小さなカフェで、アンティチョークをつまみにリースリングをたしなんでそそくさとホテルに戻ることにした。

翌日やっとの思いでオマーンに着くと僕は中東の概念が一変した。どこかで混沌とした雑多なイメージを持って

いたのだが、今まで訪れたどの空港よりも美しく、乳香の香りが心地よい。近代的な設備が備っており、デザイン性も高いのだ。ホテルでは気心の知れたバレエ団の連中が僕らの到着を待っていた。彼らの顔を見ると安堵からか、それとも突然気温30度の中に来たせいか長旅の疲れがどっと出た。一杯彼らと飲んでからベッドに入ろうと思ったがここはイスラムの国オマーン。お酒は飲めない。僕らはノンアルコールビールで乾杯し翌日の舞台へ備えたのだった。

短期間で様々な国をまわり、そして舞台をこなすことは精神的にも肉体的にも非常にタフである。しかし普段の生活からは想像もできないような訪れた先々での冒険がダンサー生活の醍醐味である。

Profile

2011年にロシアの名門ワガノワバレエアカデミーを卒業し、世界的振付家ナチョ・ドゥアトの指名を受け外国人初の正団員としてロシア国立ミハイロフスキー劇場に入団。主にドゥアト作品で活躍した後、2014年6月より世界的に絶大な人気を誇るバレリーナ、ニーナ・アナニアヴィリに引き抜かれグルジア国立トビリシ・オペラ・バレエ劇場に移籍。現在はその団の主要なダンサーとして国内外の公演で劇場を牽引している。立教大学中退。

